

信濃教育

卒業

「卒業」というと何を思い浮かべるだろうか。

サイモン&ガーファントルのサウンドオブサイレンスが頭の中を流れ、ダスティン・ホフマンが教会からキヤサリン・ロスをさらって逃げるシーンを浮かべる年代は、私より少し上の昭和二十年代生まれの人たちだろうか。若い人は知らない人も多いと思うから説明するが、これはアメリカ映画「卒業」のラストシーンである。

私の年代は、荒井由実作詞・作曲の「卒業写真」だろうか。荒井が歌の中で「変わってゆく私を、あなたはときどき、遠くでしかって」と歌う「あなた」とは、先生のことを指しているらしい。

私より下の年代は、尾崎豊の「卒業」を歌ったのだろうか。当時若者の圧倒的な支持を得ていた尾崎は、自分や将来に対する不安やわかり合えない大人たちへのもどかしさ、それらの鬱積した感情を「支配からの卒業」と歌った。

若い年代で卒業ソングの定番とされているレミオロメンの「3月9日」は、本来は友人の結婚を祝う歌らしい。歌詞の「あなたがまぶたのうらにいてことで、どれほど強くなれたでしょう」など、共に過した友に置き換えて、卒業のイメージにつながっているのだろうか。

今年も卒業のシーズンが来た。年代により、また環境やその人の事情により、卒業に対する思いはそれぞれであろう。早く卒業したいと思う人もいれば、今のままでいたいと願う人もいるかもしれない。しかし、これらの歌で歌われるように、卒業はひとりの人間の人生にとつて大きな出来事であることには間違いがない。送る側は精一杯の心を込めて送ってもらいたい。そして、卒業する人たちは胸をはって卒業してほしい。この六年間または三年間を無事に過ごすことができたのは、当たり前前のことではないのだから。